

事例2 対話的な学びを取り入れ、視野を広げ、多角的に考えられるようにする事例

○学年 第4学年

○主な領域 内容(4)ア(7)(イ)・イ(7) 自然災害から人々を守る活動

○事例のポイント

- ①様々な立場の人と対話する場を設定することで、多角的に考えることができるようにする。
- ②グループでの話し合いを通じた関係図づくりを行い、多様な視点から考えることができるようにする。
- ③ICT端末のアンケート機能を活用し、思考の深まりを可視化する。

1 小単元名 「地震からくらしを守る」(11時間)

※洪水を事例に実践をする場合を想定し、洪水がかかるところを赤字で示している。

2 小単元について(略)

3 小単元の目標と評価規準

(1) 目標

自然災害から人々を守る活動について、県内で過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、聞き取り調査や地図、年表などの資料で調べ、図表や文章などにまとめ、関係機関の働きを考え、表現することを通して、人々が様々な協力をして自然災害に対処してきたことや今後想定される災害に対して様々な備えをしていることを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追究・解決しようとする態度を養う。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などについて、聞き取り調査や地図や年表の資料などで調べて、必要な情報を集め、読み取り、災害から人々を守る活動を理解している。 ②調べたことを図表や文などにまとめ、地域の関係機関や人々が、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解している。	①過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、問いを見だし、災害から人々を守る活動について考え表現している。 ②県庁や市役所による防災対策と地域・家庭での対策を関連付けて、自然災害から人々を守る関係機関の働きを考えたり、学習したことを基に地域で起こりうる自然災害を想定し、自分たちにできることを考えたり、選択・判断したりして、適切に表現している。	①自然災害から人々を守る活動について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。 ②学習したことを基に、災害から自分たちの安全を守る行動や自然災害への備えを考えようとしている。

4 小単元の指導計画・評価計画(11時間)

過程	○主な学習活動 ・ 学習内容	【評価の観点】内容〈方法〉 ※網掛けは評価した結果を記録に残す場面	資料等
	①年表や地図から、埼玉県や日高市で起きた自然災害について調べ、県内の過去の自然災害の発生状況やどのような被害や問題が起こるのか話し合う。 ・ 県内、市内の自然災害と被害状況 ・ 関東大震災〈1923〉、東日本大震災〈2011〉、(キャサリン台風〈1947〉、伊勢湾台風〈1959〉、台風19号〈2019〉) ・ 地震が県全域、大雨による洪水が県東南	【知・技①】 資料を関連付けて調べ、県内、市内の自然災害の特徴や自然災害と地形の関係を理解している。 〈発言・ノート〉 編 P49 指導計画作成の留意事項(7)	・ 災害年表(内閣府防災情報「過去の災害一覧」、埼玉県HP「過去に発生した主な水害」他)

つ か む	<p>部の平地で起きていること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然災害で道路、電気、水道等が使えなくなり、日常生活が送れなくなる 	<p>編 P49 指導計画作成の留意事項(6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・埼玉県地図 (地形図)
	<p>②地震発生直後 (洪水発生後) にとる自分の行動や避難所でのくらしから、災害から人々の命や財産を守る活動などについて話し合い、災害対策について学習問題を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震 (洪水) 発生時、自分がとる行動 ・地震発生直後と避難所の人々のくらし (水害発生前後と避難所の人々のくらし) の比較 	<p>事例のポイント③ ICT端末を使って回答させ、全員の回答を見られるようにする。また、学習前の考えとして記録しておく。</p> <p>【思・判・表①】 地震 (洪水) による災害からくらしを守るために協力する人々の様子に着目し、学習問題を考えている。</p> <p>〈発言・ノート〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地震 (洪水) 発生後の行動 (タブレット) ・写真資料 (地震発生後の様子、避難所生活の様子)
<p>学習問題 埼玉県では、地震 (洪水) からわたしたちを守るために、だれが何をしているのだろう。</p>			
調 べ る	<p>③学習問題の予想と学習計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校、地域、市、県、国の対策 ・学校の地震 (洪水) 対策に関する質問 <p>事例のポイント① 相手の話を聞くだけでなく、自分たちの予想を検証するための質問を考えさせる。</p>	<p>【態①】 自然災害から人々を守る活動について予想や学習計画を立て、解決の見通しをもっている。</p> <p>〈発言・ノート〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート (児童が調べたことを整理する)
	<p>④校内の災害対応従事者から、学校やその周りでどのような災害対策をしているのかを聞き取り、ワークシートに整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家での対策 ・避難訓練、保護者へのメール、安全点検 ・市との連携 (避難場所、防災無線の設置) ・備蓄庫と食料、毛布 (ポット) ・災害対策の「地震 (洪水) への備え」「災害発生直後の行動」、「日常生活への復旧」という視点 <p>編 P49 指導計画作成の留意事項(2)</p>	<p>【知・技①】 校内の災害対応従事者から、学校の取組を聞き取り、学校では災害発生時の対応と事前の備えの両方を市と連携しながら行っていることを理解している。</p> <p>〈発言・ワークシート〉</p> <p>事例のポイント① 友達と話し合っって質問内容を考える。校内の災害対応従事者である教職員に質問をすることで、様々な人々との対話を積み重ねさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の災害対応従事者 (校長、教頭、安全主任など)
<p>⑤市役所の職員から市の災害 (洪水) 対策について聞き取り、ワークシートに整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日高市の取組 (市の防災計画の作成、防災無線、土砂災害 (洪水発生) を想定したハザードマップ作成、消防団 (水防団) との連携、水位監視カメラの設置、自主防災組織への支援・連携) ・埼玉県や国との連携、関係性 ・公助 <p>事例のポイント① 前の時間に確かめられなかったことやもっと詳しく聞きたいことを質問させる中で各機関の防災対策のつながりや共通点に気付かせる。</p>	<p>【知・技①】 市役所の職員から市の災害 (洪水) 対策を聞き取り、市が大規模災害発生時の対応計画、災害に備えた環境の整備や役割分担などを県や国と連携しながら進めていることを理解している。</p> <p>〈発言・ワークシート〉</p> <p>編 P49 指導計画作成の留意事項(4)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災ハザードマップ ・防災無線の受信機 ・防災対策本部 (写真) ・市役所危機管理課職員 	

調 べ	<p>⑥自主防災組織の取組や働きなどについて、資料をもとに調べ、ワークシートに整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域防災訓練 ・避難経路の確認、安全点検 ・市役所、消防団などとの連携 ・自助、共助 <p>事例のポイント① 校内の災害対応従事者、市役所の職員、地域の方など、異なる立場の人々とのやりとりから、人々の命を守り、生活への負担を軽減させるという防災の取組の共通点に気付かせる。</p>	<p>【知・技①】 自主防災組織は、市や消防団など地域の諸機関と連携して自分たちで地域の人たちの安全を守る備えをしているということを理解している。 〈発言・ワークシート〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域防災訓練の取組 (動画) ・自主防災組織の取組 (写真) ・防災ハザードマップ
る	<p>⑦埼玉県地震(洪水)対策について、県庁にある埼玉県危機管理防災センター(県土整備事務所)の方から聞き取り、ワークシートに整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・埼玉県地域防災計画 ・気象庁の災害放送 ・情報発信、情報収集 ・自衛隊の出動要請 ・首都圏外郭放水路 ・危険個所の区域指定 	<p>【知・技①】 埼玉県は、地震発生時における情報共有を市と行う仕組みを整えるとともに、国や市と連携を取り、県民の命を守る体制を整えていることを理解している。 〈発言・ワークシート〉 埼玉県は、県の様々な機関と連携して、洪水発生のある場所の河川改修や危険個所の区域指定をし、住民に家の周りの情報を伝えたり、洪水発生前に避難する仕組みを整えたりしていることを理解している。 〈発言・ワークシート〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・埼玉県危機管理防災センターの職員 (県土整備事務所の職員) ・防災ハザードマップ
ま と め	<p>⑧第④～⑦時で作成したワークシートの内容を基に、グループで県庁と他の機関の働きと関係について話し合い、関係図に整理する。(本時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「地震(洪水)発生前の備え」「災害発生直後の行動」「日常生活への復旧」の場面ごとの各機関の役割 	<p>【知・技②】 各機関の役割を関係図に整理し、まとめている。 〈活動・発言・関係図プリント〉</p> <p>事例のポイント② グループで各機関の働きやつながりを話し合い、矢印などで示しながら、整理して関係図づくりをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・関係図プリント
る	<p>⑨関係図プリントを基に埼玉県の防災体制について気付いたことを確認し、学習問題の結論を導き出す。</p> <p>学習問題の結論 埼玉県では、地震発生に備え、県庁が中心になり、国や市といつでも協力する仕組みをつくったり、被害を少なくするための計画や準備をしたりしている。また、地震による被害が発生したときにも、国や市と協力してできるだけ早く被害の様子をつかみ対応する仕組みを作っている。 埼玉県では、洪水発生に備え、県庁が中心になり、川の水量が調節する工事や危険個所をチェックして住民に知らせる仕組みを整備して、早く避難できるような準備を整えたり、洪水が発生しても国や市と協力して対応する仕組みを作ったりしている。</p>		

編 P49 指導計画作成の留意事項(2)

生 か す	<p>⑩⑪第②時と同様に災害への備えと発生時の行動について再度考えるとともに、自然災害が起きたときに自分たちができる共助について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害が起きる前に自分にできる備えや災害発生時の自分の行動 ・共助の内容 ・自己の学びの振り返り（第1時のときの自分の考えと比べる） 	<p>【態②】</p> <p>学習したことを基に、災害から自分たちの安全を守る行動や自然災害への備えを考えようとしている。〈アンケートへの記述〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地震への備えや発生後の行動
	<p>編 P49 指導計画作成の留意事項(2)</p>	<p>事例のポイント③</p> <p>ICT端末を使い、全員の回答内容を見られるようにする。第2時の回答と比較し、児童の思考の深まりや認識の変容を見取る資料にする。</p>	

5 本時の学習指導（8/11時間）

(1) 目標

震災に関わる各機関の役割をグループで話し合いながら整理し、関係図プリントにまとめることができる。 〈知識及び技能〉

(2) 展開

主な学習活動 ・ 学習内容	指導上の留意点 評価 〈方法〉	資料等	時間
<p>1 前時までの学習を振り返り、本時の課題をつかむ。</p> <p>課題</p> <p>地震対策において、それぞれの機関はどのように連携しているのだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各機関の対策のつながりに問題意識を高めさせ、本時の課題をつかませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの資料(ワークシート等) 	2
<p>2 関係図の整理の仕方を確認する。</p> <p>関係図の整理の仕方</p> <p>○地震対策における3つの場面と関係機関の働きかけを矢印と対策名を明記してまとめる。</p> <p>【3つの場面】</p> <p>「地震発生前の備え」「地震発生直後の行動」「日常生活への復旧」</p> <p>【関係機関】</p> <p>「自分たち」「学校」「地域」「市役所」「県庁」「国」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・9人1組の大グループとし、それを更に3人1組の小グループ3つに分ける。 ・小グループごとに1場面の関係図を作成することを確認する。 ・関係図プリントにない機関を付け足す必要があるときは、付け足してよいことを伝える。 ・最後に小グループごとに作成した関係図を大グループ全員で確認し、補足・修正を行うことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係図プリント 	5
<p>3 小グループで関係図に整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震対策の3つの場面と各機関の働きかけ <p>事例のポイント②</p> <p>既習内容を根拠に話し合わせ、整理させる。</p> <p>7(1)②参照</p>	<p>評 調べたことを基に、各機関の役割や関係を整理し、まとめている。</p> <p>【知・技②】〈活動・発言・関係図プリント〉</p> <p>⇒ 「自分たち」「学校」「市役所」「県庁」「国」の対策の内容とその対策が、どの機関と関係しているのか確かめさせ、関係図プリントに矢印を書き足すように促す。</p>		20
<p>4 小グループごとに整理した関係図を大グループで見せ合い、補足・修正する。</p>			10
<p>5 本時の活動を振り返り、ノートに整理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時に分かったこと、考え方が変わったこと、もっと知りたいことや分からないことなど具体的な視点を示し、振り返らせる。 		8

6 板書計画

課題 それぞれの機関はどのように連携しているのだろうか

1 れつの大グループ（9人）

3人ずつ小グループ

「そなえ」、「地しん後」、「ふっきゅう」
それぞれのつながりを矢印で整理する。
説明する。

- ・足りない機関はつけ足す
- ・取り組む時間 20分
- ・小グループ→大グループでかくにん

大グループ1 大グループ2 大グループ3 大グループ4

そなえ

そなえ

そなえ

そなえ

地しん後

地しん後

地しん後

地しん後

ふっきゅう

ふっきゅう

ふっきゅう

ふっきゅう

7 事例のポイントと考察

(1) 事例のポイントについて

ア ①様々な立場の人と対話する場を設定することで、多角的に考えることができるようにする。

本事例では、積極的に対話的な学びを取り入れ、友達、地域の人、従事者など様々な立場の人々との交流を積み重ねさせた。その際、人と人とのつながりや立場による働きの違いなどに着目させ、社会的事象の見方・考え方を働かせながら交流できるようにした。



これは、対話を通して社会的事象を捉えることが、児童の深い思考、深い理解につながり、視野を広げ、多角的に考えられるようになることにつながると考えたためである。

実際の授業では、第④・⑤・⑦時において、災害対応に関連する様々な立場の人々と直接交流する機会を設定した。始めは話を聞かせてもらうことが中心だった児童も、様々な人から話を聞かせてもらううちに、さらに詳しい内容を質問することができるようになった。

例えば、ある児童は、学校の防災対策を調べた際、学校の体育館が避難場所になることが分かった。しかし、避難所の詳細について説明がなかったため、避難所の設置担当や具体的な取組が分からなかった。そこで、市役所の防災対策を調べていると、避難場所の設置主体が、市だということが分かった。この児童は、ここで疑問に思っていたことが聞けると判断して以下のようなやりとりをしている。

○児童（C）とゲストティーチャー（G）のやりとりの一部



C「避難場所にはどのくらいの人が集まるのですか。そのとき、歯磨きやお風呂などはどうするのですか」

G「体育館では、259人の受け入れを想定しています。歯ブラシは市の備蓄品の中にないので、非常持ち出し品を用意するときに自分で用意するといいですよ。避難所生活ではお風呂に入れられない場合もあります。」



児童の質問の内容から、避難所が「日常生活を送る場」ではなく、「最低限の生活を一時的に送る場」であることを理解したと捉えられる。

イ ②グループでの話し合いを通じた関係図づくりを行い、多様な視点から考えることができるようにする。

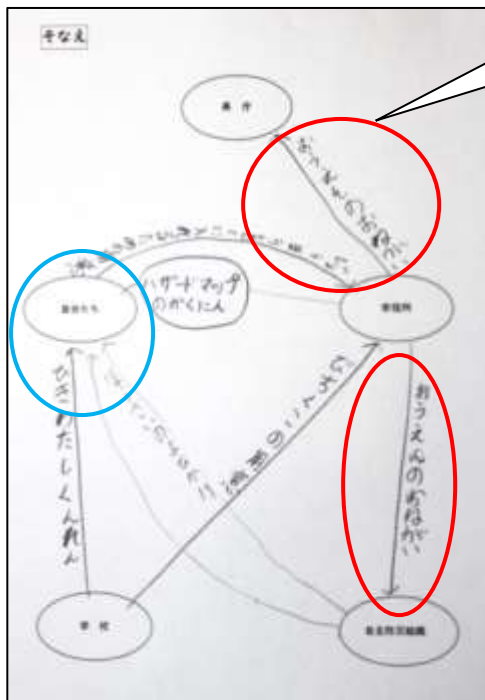
本事例では、第⑧時において「調べる」過程で追究しことを基に、まず「地震発生前の備え」「地震発生直後の行動」「日常生活への復旧」の3場面に分けて、各機関の役割を関係図に整理させた。その際、対話的な学びとなるよう、1場面3人1組の小グループで活動させた。その後、9人1組の大グループで3場面全てを見直す活動をさせた。

これは、話し合う人数を増やし、様々な人々の意見を交流し合う活動を位置付けることで、自分が気付かなかった考えに触れさせ、視野を広げ深められるようにすることが、多角的に考えることにつながると考えたためである。



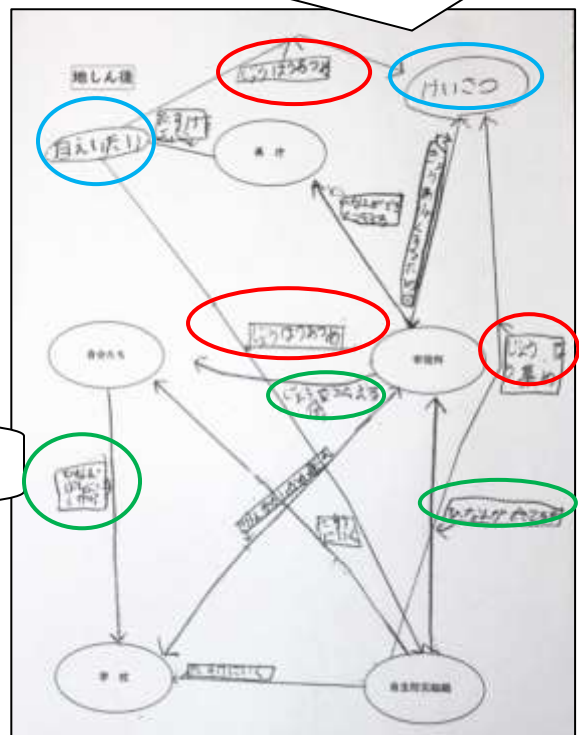
実際の授業では、第⑧時において、(1)何の機関が何の対策を、(2)どの機関に向けて働きかけるか(行うか)に注目させて、関係図づくりを行わせ、対話的な学びを通して、自分の意見を関係図づくりに反映させることができた。そして、関係図作成後、「地震発生前の備え」「地震発生直後の行動」「日常生活への復旧」の共通点や異なる点について気付いたことを話し合った。

○児童が作成した関係図

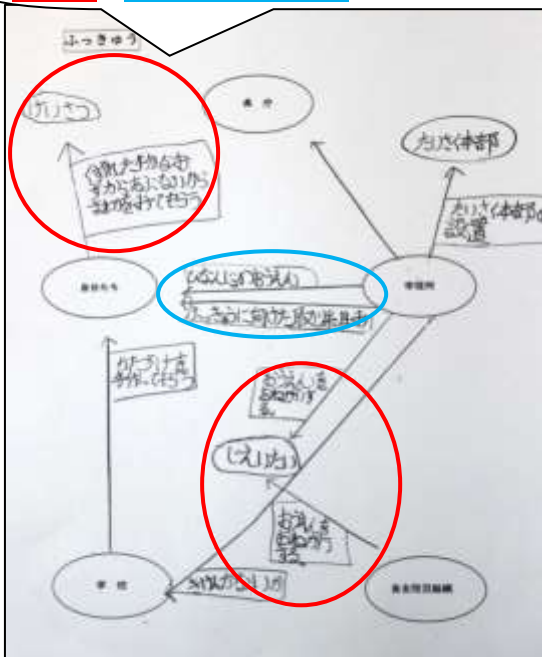


「そなえ」では、各機関が人々の命を救うために連携している。「わたしたち」への矢印の集中と、市役所からの応援要請の矢印に表されている。

「地しん後」は、自治体への情報集約と応援要請、地域住民の避難行動について整理されている。また、応急行動に必要な機関として自衛隊や警察を新たに設けている。



「ふっきゅう」は、倒壊した建物の撤去に関する応援要請と避難所生活の支援について記されている。



3場面の共通点として、機関からの矢印が「自分たち」に集中していることと、機関同士で矢印が行き来していることの2点が挙げられた。その意味について話し合った結果、「自分たち」への矢印の集中は人々の命を多くの機関が助けようとしていること、矢印の行き来は機関同士が協力連携していることを捉えることができた。

ウ ③ ICT 端末のアンケート機能を活用し、思考の深まりを可視化する。

本事例では、第②時に災害発生時に自分がどう行動するかを考えさせ、アンケート機能(Google form)で集約した。同様の質問を第⑩時にも行った。そして、学習前後の個々の考え

を対比できる形で整理し、児童に示した。

これは、単元のはじめと終わりに自分の考えを可視化しておくことで、自分の考えと思考の深まりを客観的にとらえさせることができると考えたためである。

実際の授業では、「つかむ」過程（第②時）と「生かす」過程（第⑩時）にアンケート機能を使って、同一の質問に回答させるようにした。第②時は、自分の避難行動や家族の安否を気にするなど、自助の視点に立った回答が多かった。第⑩時は、自助でも災害発生前の備えや災害発生時の行動、復旧という場面を踏まえた回答や、地域の人との共助の視点に立った回答が多く見られた。この単元で学んだ自助、共助、公助の中から、地震発生前後の場面で適切な行動を判断して、自分の行動を表現することができるようになった。

	A児	B児	C児
1 回 目 の 記 述	<u>スリッパをはき、自転車のヘルメットをかぶり、ブレーカーとガスをおとし、外に行って、非常用電話を使用する。</u>	<u>ケータイを取り家族に電話し、状況を話して、どうすればよいか聞く。電波がなかったら、すぐに外に出て、避難して危険な物がない、原っぱなどに逃げる。</u>	<u>つくえから出て、家のことは気にせずに家族のことを気にする。もしも電気が使えなかったら、家族に電話する。(もしも電気が使えなかったら外に出て様子を見る。)</u>
2 回 目 の 記 述	<u>スリッパをはいて、外に行く。外に行ったら避難所に行く。困った人がいたら助け合う。</u>	<u>急いで、家族に電話をできるじょうきょうだったらして、用意しておいた洋服、歯ブラシ、歯みがき粉、布団などを持って、避難所(学校)に行く。</u>	<u>最初に食料を近くにおいて、いつ地震がきても平気ようにする。スマホをもっていたら、お母さんやお父さんに大丈夫かを聞く。地震が収まった時、家の中の様子を確かめて外に出る。近所の人などに話しかけて、けが人や死者がいなか確認する。(協力する。)協力することで、みんなが安全かどうか確かめられる。</u>
考 察	A児は、初め日ごろ家族で話していた防災行動をとって、外に出て連絡をとることを第一に考えるという自助の視点だけを記述していた。2回目は避難所への移動と困った人と助け合うという共助の視点が加わった。	B児は、一貫して自分の避難行動に関する言及である。災害を恐れている様子も見られる。ただし、初めは家族に聞いてから行動することを考えていた。2回目は事前に準備した非常用持ち出し用具や避難先の行動が記述されていて、学んだことを自分なりの方法で実現しようとしている。	C児は、初め家族の安否とライフラインを考えることを記述した。2回目は地震に備える視点と避難行動前に地域の人に話しかけるという自分にできる共助の行動を記述した。また、「みんなの安否を確かめるために協力する」という家族以外の安否も気にしていた。学んだことを自分なりに生かそうとしている記述である。

(2) 実践に当たっての留意点

本小単元を実践するに当たっては、ゲストティーチャー（以下、GT）を招く際、その方の所属機関内での手続きが必要な場合があるため、授業日の約1か月前に連絡を取り、日程調整を図ることが望ましい。

また、授業者の意図とGTの思いをすり合わせていくことが大切である。GTと児童の交流は、従事者からしか聞けない気持ちや考え方にも触れることができる貴重な機会である。その貴重な機会が児童にもGTにもよいものになるよう、授業者とGTが対話を重ねる必要がある。その際には、単元の目標と指導計画、本時の目標と主な学習活動を理解していただく資料を準備することが大切である。それによって、授業でどのような指導をしていただきたいのか、時間はどのくらいなのかを明確に伝えていく。GTの思いを大切にしつつ、授業のねらいを達成するために、GTとの十分な打ち合わせを心がけていきたい。